支局長からの手紙

名門エースの現在地

焼けるような8月。有田市のマツゲン有田球場で、マツゲン箕島硬式野球部の面々が練習している。7日に開幕した夏の甲子園では序盤の3日間、選手と観客を暑さから守るために試合開始を午前と夕方に分ける2部制を初めて採用した。ここ有田の昼下がりのグラウンドは空気がピーンと張り詰め、暑さを感じない。選手たちが投げ、打ち、走る。昭和の鬼軍曹を地で行くコーチがノックを浴びせる。

8月31日から4日間、栃木県や群馬県である全日本クラブ野球選手権に西近畿代表として出場する。優勝すれば、秋に京セラドーム大阪で開かれる日本選手権の切符をつかむ。夏に東京ドームである都市対抗と共に社会人野球の2大大会だ。豊富な練習量でクラブチームの強豪として知られるマツゲン箕島だが、これらアマチュア野球の最高峰の舞台に出るのは簡単ではなく、ましてや資金力のある企業チームの壁は非常に高い。

マツゲン箕島の選手たちは和歌山や大阪など4府県でスーパーマーケットを展開する「松源」に雇用されている。生活の保障を得て野球に打ち込めるものの、早朝に店に出勤して働き、球場に駆けつけて午後から練習という日々はハード。日本選手権出場が懸かる大一番を控えてはいても、お盆は果物などの供え物やオードブル、すしが売れて各店とも大忙しのため、練習は休んで終日勤務となる。

指揮を執る西川忠宏監督(63)は箕島高2年だった1977年のセンバツで故尾藤公監督のもと4番サードとして全国制覇に貢献。3年時は甲子園に春夏連続出場した。マツゲン箕島は96年に西川監督ら箕島高出身者が中心となって箕島球友会として発足し、和歌山箕島球友会を経て2019年1月に現名称となった。

ここでは30代のベテラン選手として生きる道はほぼなく、おおむね25歳か26歳までに決断を求められる。すなわちプロの高みへ羽ばたくか、見切りをつけるか。毎年のように10人以上の新人が入るため、同じ数の選手に夢をあきらめさせるのも西川監督の仕事だ。

勝利でもって支援企業と地域の期待に応えようと西川監督の指導は厳しいが、そこには「スーパーの職場の仲間に仕事で認められて初めて、野球の応援をしてもらえる」という信条が含まれる。シーズンオフには、選手たちは津波避難路の草刈りや保育所の清掃など地域貢献活動にも出向く。野球選手を引退後、松源で管理職やバイヤー、店長として活躍するケースは多いという。

マツゲン箕島を体現する選手を紹介してほしいと頼むと、西川監督は「おーい、ユウスケ!」と、シート打撃練習で登板を終えたばかりの森悠祐投手を呼んだ。

森投手は高校球界を代表する名門、広陵(広島)の出身で24歳。17年夏の甲子園は背番号11でベンチ入りして準優勝。翌18年夏はエースナンバー「1」を背負って再び甲子園に出場、初戦敗退したが最速149キロの右腕はプロ球団の熱視線を集めた。だが大阪商業大に進んでから肩を故障して手術し、投げられない日が続いた。

「マツゲンさんに拾っていただきました。球速は戻ってきたのですが、肘も疲労骨折して……。今は肩と肘に注射を打ちながら投げています。今日はスライダーやチェンジアップが思うところによく決まりました。京セラ(ドーム大阪の日本選手権)で勝つことがチームの目標ですし、自分もそこで投げたい。好きな野球なので、後悔なく終わりたいです」

森投手は笑みをたたえ、静かに語った。配属先の店には朝の6時半に出勤し、総菜を作ってパックに詰め、値段のシールを貼り、売り場に並べているという。グラウンドではシート打撃が終わった。森投手は「この後はウエートトレーニングとショートダッシュをやるつもりです」と立ち上がった。その鍛え上げられた背中は、誰も寄せ付けない孤独さをたたえていた。プロを嘱望されながら長くケガと闘ってきた逸材は今、自らの残り時間を計算し、チームに恩返ししようとしているのだろう。

球場を辞去する際に西川監督にあいさつすると、ぽそっとつぶやいた。「森はチームの精神的支柱なんです。みんな、(森投手の苦労や努力を)知ってるんでね」

【和歌山支局長・鶴谷真】

シート打撃練習で力投する森悠祐投手=有田市で